
山極寿一(1952～)『**老いの思考法**』文藝春秋 2025 年

1.現代社会への批判の本として

「老い」について書かれた本であるとともに、現代社会への批判の本として書かれている。本書の各所で現代社会への言及がなされている。

(略)だから人間の老いを考えるためには、自然の存在である人間と歴史的な構築物である文化との調和がどのようにして成り立つのかに目を向けねばならない(p.212)

さらに、情報通信革命によって常に更新される情報に価値が増し、高齢者が持っている過去の経験や知識が若い世代にとっては無価値なものになりつつあります。人と人をつないでいた縁も薄れ、人々は人への信頼ではなく、社会制度やシステムを頼りにして生きようになりました。その結果、人々をつなぐ役割を果たしてきた高齢者の存在が急速に薄れつつあるのです。
(p.213～214)

前回の課題図書、三宅香帆(1994～)『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』(集英社 [2024])で、著者が示した以下の構図(p.206)を使えば、

<知識と情報の差異>	
「情報=(	知りたいこと)」
「知識=(ノイズ+知りたいこと)」	
※ノイズ…他者や歴史や社会の文脈	

このうち、自分に関係のある**情報**だけが、幅を利かせている。以前なら読書の「豊かさ」とされていた他者や歴史や社会の文脈といった人と人をつなぐ思考が「ノイズ」と名指されていることが、逆説的にもその証左となっている。

効率性や生産性というのを金科玉条のごとく掲げてきた現代社会において、老いの時間というのは、効率性とは無縁のところにあるアジール(聖域、自由領域)とも言えます。(p.25)

この「老いの時間」が失われている、と著者はいうのだ(よくいわれる「最近の若者は…」を、もじっていえば「最近の年寄り…」という訳だ、書きながら、トランプ大統領(79歳)が脳裏をかすめた、彼は気の毒にも美しく老いていない！プーチン(73歳)、ネタニヤフ(76歳)見渡せばいかに美しくない高齢者が多いことか！)。「老い」について考えることは、現代社会のありようについて考えることと通じている。本書にはさまざまなアイデアが詰め込まれている。

➡わたしじしんの問題に引き寄せて考えてみれば、近代が失ったものが何か、老いについて考えることで見えてくるものがある。それは何か。本書で蒙を啓かれた思いがしたのは、三点。

①「自然」と②「時間」と③「身体知」いずれも近代においてなおざりにされてきたものだといえる。

<前回のおさらい>

じつは近代以前には、人々の生活と読書は生きることに於いて重なりをもっていた。むしろ近代は、その教育制度の開始、整備とは裏腹に、生活と読書を切り離してしまった側面があるのではないか。少し皮肉めいた言い方をすれば、「お勉強」にしてしまった側面があるのではないか。この問題を検討するにあたって前回紹介のあった、渡辺京二『逝きし世の面影 日本近代素描Ⅰ』（葦書房 [1998]）には、

日本近代が古い日本の制度や文物のいわば蛮勇を振った清算の上に建設されたことは、あらためて注意するまでもない陳腐な常識であるだろう。だがその清算がひとつのユニークな文明の滅亡を意味したことは、そのさまざまな含意もあわせて十分に自覚されているとはいえない。十分どころか、われわれはまだ、近代以前の文明はただ変貌しただけで、おなじ日本という文明が時代の装いを替えて今日も続いていると信じているのではなかろうか。つまりすべては、日本文化という持続する実体の変容の過程にすぎないと、おめでたくも錯覚して来たのではあるまいか。

実は、一回かぎりの有機的な個性としての文明が滅んだのだった。(略)

それはいつ死滅したのか。むろん年代を確定できるような問題ではないし、またする必要もない。しかしその余映は昭和前期においてさえまだかすかに認められたにせよ、明治末期にその滅亡がほぼ確認されていたことは確実である。(p.7)

として、このあと「それを教えてくれるのは実は異邦人観察者の著述なのである」として、オリエンタリズム批判にも注意を払いながら、「滅んだ文明の諸相を追体験」する。

「いまや私がいとしさを覚えはじめている国よ。この進歩はほんとうにお前のための文明なのか。この国の人々の質樸な習俗とともに、その飾りけのなさを私は賛美する。この国土のゆたかさを見、いたるところに満ちている子供たちの嬉しい笑声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見いだすことができなかった私は、おお、神よ、この幸福な情景がいまや終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳をもちこもうとしているように思われてならない」(p.10 ハリス通訳 ヒュースケン)

➡『逝きし世の面影』で描かれている日本には、先の①「自然」と②「時間」と③「身体知」に相当する思考法が息づいていたことが感じられる。そしてそれは滅んだ。

NHK 連続テレビドラマ小説『ばけげん』のレフカダ・ヘブンがヒュースケンら異邦人観察者に重なる。

2.近代においてなおざりにされてきた、①「自然」と②「時間」と③「身体知」

①「自然」

(p.90)「予測できないもの」に対処する直観力 (略)自然は同じことは決して繰り返さないの
で、新しい予想もしなかったような変化が目の前で起こったときに適切に対処する力が必要に
なってくる(略)高齢者は経験知を豊富にもっています。たっぴりと時間があって、生産性を求
められない自由な身です。だから、子どもたちと一緒に、未知なものに対して、どういう風に対
処したらいいのかを考えることができます。

京都大学の哲学者・西田幾多郎が「幾千年来我らの祖先をはぐみ来った東洋文化の根底
には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くと云ったようなものが潜んでいる」(『働くものか
ら見るものへ』1927年)と記しています。(p.92)

➡偶然だけれども、前回のレジメで、西田幾多郎(1870~1945)の「**述語的論理**」という考え方を取
り上げた。それは見かけ(=主語)では捉えられない運動(=述語)の論理だった。

バルガス・リョサ(1936~2025)『緑の家』において、人夫にフシアを認めること(を読者がで
きなかったこと)、平野啓一郎(1975~)『本心』において、AIによる再現で、生前とそっくりな母
親を求めてしまったこと(しかし、結局のところ、そこに母親を感受することはできなかったこと)、
これらはいずれも近代において優位な「**主語的論理**」によってもたらされているのではないか。
それは運動を見損なう。

主語(的)	+	述語(的)
近代は主語が述語をリードする 見かけの同定(母は母)が先んじる		ジャングルのなかには、視界をさえぎるいろい ろなものがあって見通しが悪い。奥に隠れ ているものを察知しながら、その場その場で 適切な行動を取っていかなければなりません。 (p.92) 自己とはむしろ、そこになにかが起きる場 述語的統一と見られるべき※

(※中村雄二郎『問題群 -哲学の贈り物-』岩波新書[1988] p.136)

②「時間」

(p.26) いまや核家族の少子高齢化社会において、子育ては「コスト」になってしまいました。ス
トレスフルな日々において、自分の時間を削られていると思ってしまう保護者も多い。社会のあ
らゆる「時間」や「労力」には対価を払うという感覚が、育児を「仕事」にしてしまった側面もある
のでしょう。(略)

効率という呪縛に風穴をあけられるのが老いの力ではないでしょうか。
労働者は時間単位で価値が測られるようになり、時間は人間を管理する手段となります。

(p.208)

- ➡近代の時間はカルロ・ロヴェッリ(1956~)『時間は存在しない』で説かれるように、ニュートンによって作られた時間だった。著者は本書の最後で、次のようにいう。

自然の時間にゆっくりと身を委ね、生命の根源的な喜びに立ち返るのです。効率とは無縁でいられることは老年期の大きな特徴です。

そこには、刻一刻と変化する自然の予兆に心躍る豊かさもまたあるのではないのでしょうか。

そう、美しい時間が未来から流れ込んでくるのです。(p.211)

- ➡この「未来から美しい時間が流れ込んでくる」という表現には、ジャングルで長年ゴリラの調査・研究をしてきた霊長類学者の経験が裏打ちされているように感じられた。

あらかじめ計画された時間では、計画されたことしか捉えられない。いわば過去に作った規矩に時間が閉じ込められるのだ。

ジャングルでゴリラと邂逅する美しい時間は、そのような規矩では得られないものだったのだ。ゆえに著者は、遊びについては「本来遊びというのは、ルールは見つけていくもの、仲間のなかで自然に立ち上がっていくもの(p.95)」といい、年配のリーダーが集団を作るときには「ルールよりも先に信頼が必要(p.181)」というのだ。

③「身体知」

物事にのぞむときの態度。心構え、気構え、体の構え、心の持ち方といった身体知(p.42)

共同体と家族という編成原理がまったく異なるものを両立させる力(共感力)を人間は育んできた。「功利性から一歩ひいて全体を俯瞰し、みなを糧になるよう調整してくれる高齢者の存在」が鍵だった。(p.47)

- ➡『緑の家』の回で、『緑の家』という作品が描くのは、「調和」ではなく「衝突」であり、しかし、その表向き穏やかならぬ「衝突」には、「調和」が胚胎する排他性(あらかじめ作られた調和的なルールが、それに沿わないものを排除してしまう)を、開かれたものにしていく契機があるとした。

本書で著者は「ゴリラは「負けない」、相手と対等であるということがゴール」だということを紹介し、「メンツを保ったまま対等な関係を維持」し、それを仲裁、調整することができるのが高齢者の能力だとする。

ここから導かれる逆説的な帰結は、調整役があれば、気兼ねなしに、遠慮なしに「衝突」することができるということだ。ここでは「衝突」が前提されている。ある種の平和の偏重が、争いを避けようとするあまり、個性を削いだ扁平で窮屈なものになるということがある。

また、じつは絶対的な平和への希求こそが、「衝突」の要因である相手の殲滅行動に駆り立てているとはいえないだろうか。(現在も続く戦争の執拗なまでの相手国への爆撃はその証左ではないか。彼らが望んでいるのは、自国の絶対的な平和を脅かすいかなる相手の存在を許さないという態度にみえる)正しく「衝突」する「身体知」が、現代社会にはない。